ICCK

International Conference Center Kyoto

2018 Spring

国立京都国際会館

京都で、会いましょう。

巻頭インタビュー

公益財団法人国際高等研究所前所長　京都大学名誉教授　長尾 真氏

情報化社会の進展が、新しい時代を創り出す。

特集

ICCK 講演録　知の言葉

Kyoto International Conference Center

Profile

1936年生まれ。専門は自然言語処理・画像処理・パターン認識。機械翻訳国際連盟・言語処理学会を設立。1997年紫綬褒章、2004年レジオンドヌール勲章シュバリエ章受章。2008年文化功労者。京都大学第23代総長、独立行政法人情報通信研究機構理事長、国立国会図書館長などを歴任。日本学士院会員。著書に『人工知能と人間』『「わかる」とは何か』『情報を読む力、学問する心』など。

巻頭インタビュー

公益財団法人国際高等研究所前所長
京都大学名誉教授

長尾 真氏

情報化社会の進展が、新しい時代を創り出す。

京都大学総長や国立国会図書館長を歴任、そして関西文化学術研究都市（けいはんな学研都市）にある国際高等研究所所長をこの春まで務められ、人工知能（AI）やビッグデータ、IoTの研究開発など情報分野に長年取り組んでこられた長尾真さんに、情報化が著しい現代社会についてお話を伺いました。

情報化社会の進展は地方創生へ繋がる

木下博夫館長（以下、木下）　現代はビッグデータのような膨大な情報が溢れる情報化社会であり、医療、産業振興、保険等各種分野において成果が出ている一方、情報の信頼性・信憑性を見極めることも重要な課題となっています。先生は今の情報化社会をどのようにご覧になっていますか?

長尾真氏（以下、長尾）　私が大学に入った頃にコンピュータは黎明期でして、人工知能という言葉が出来たり画像や言語をコンピュータで処理することが始まり、人間と同じようなことができる万能な機械だと謳われていました。当初はその技術が社会に及ぼす影響をわかっていなかったのですが、ネットワークが発達してからは、いろいろな意味で社会に多大な影響を与える技術であることがはっきりしてきましたね。情報化社会の良い面は、日本にいながら世界各国のことが直接映像でわかるなど、世界を身近に感じられる時代になってきた点があげられます。世界中で争いごとも起きていますが、様々な人種が相互理解していくためにも、情報は非常に大事な道具になっていると思います。私はこれからもまだ多くの意味で、情報化社会は進展していくと考えています。

木下　長尾先生は自然豊かな「林間都市」に注目しておられますが、情報技術をうまく活用できれば、まちづくりや私たちの健康生活にも役立つかもしれませんね。

長尾　人間は本来、自然の中にいて活性化される、そういう生き物だと思います。情報技術が発展すると、どこにいても仕事が出来る在宅勤務が成り立つし、医療も遠隔診療ができる、子育てでも自然の中で泥んこになって遊べるような幼稚園に通うこともできます。そういうことを考えると地方創生にも合致する場面があると思うのです。これからは地方というものを人間にとって豊かなものであるように作り変えていくことが大事であると考えています。

人工知能は人間の心には勝てない

木下　人工知能（AI）の開発で私たちの生活が便利になっていく一方、人間の思考や行動に近い能力を備えつつあるAIについて、先生はどのような意見をお持ちでしょうか?

長尾　これからどんなに人工知能ロボットが発展したとしても、人間のように心を持つところまではいかないというのが私の見方です。人間は相手とコミュニケーションを取る際、お互い相手の心を考えながら自分の行動をとっています。論理や理屈の世界でロボットはいくらでも力を発揮出来ますが、論理の世界の真底には心があり、これは100年経ってもロボットには備え付けられないと思うんですね。人間は心を持っていてお互いに理解しながら進んでいける、そんな人間社会を私は非常に面白く、良い世界だと思っています。

知識量だけだとコンピュータには敵いませんが、人は結果だけを覚えるのではなく、プロセスをしっかり踏んでいくことを勉強しないといけません。私は50年前から科学技術の研究に携わっていますが、昔は科学技術だけでなく様々な分野において夢のある時代だったように思います。しかしながら現代はあらゆる道具が整備され、やれば出来ることばかり。やはり人間は夢を持って進まないと面白くありません。私は言葉の問題に取り組もうと、言語翻訳をコンピュータで行う研究をやってきましたが、やはり言葉というものは人間が行う最も人間らしい行為ですから、そんなに簡単にできる訳ではありません。だからこそ、コンピュータプログラムの勉強だけでなく、言語学や認知科学のほか、人間とは一体どういうものであるのかということを哲学も含めて様々な勉強を行いました。工学分野だけでなくオールラウンドな学問をある程度知った上で、自分のやっていることは一体どういうことなのかという位置付けや価値付けをしっかり考えながら進まないといけないと感じています。

日本初開催となる国際博物館会議

（第25回 国際博物館会議京都大会）

木下　日本初となる国際博物館会議（ICOM）の京都開催がいよいよ2019年の秋に迫ってまいりました。本会議は京都国際会館で行わせていただきますが、大会への期待や展望はありますでしょうか?

長尾　世界中から京都に来ていただき、長い歴史を刻んだ都市というものをじっくり見ていただくのは大事なことですが、全てを見ることは不可能ですので、デジタル技術でもって観賞したり、バーチャルリアリティ（VR）で京都を見て回ることが出来たら面白いだろうなと思っています。実際に訪問するのと同じような効果をVRで出すことにより、京都あるいは日本をよりよく知ってもらう努力をする。そうすれば日本の技術力を見せることも出来るし、その技術力を高めていくことにも繋がると思っています。また、博物館を見て回るだけでなく、京都全体を一つの博物館と定義して楽しみ方を設計し、その観点でまちを整備していけば、京都という都市にもっと磨きがかかり魅力が出てくるのではないでしょうか。

木下　会議の開催により、公共的な知的財産のデジタルアーカイブ化にも関心が高まると予想されますが、科学技術の発展により変化していく文化資源の保存、在り方についてお聞かせください。

長尾　震災や火事などといった思いもよらない災害に耐えるためにも、やはりコンピュータによる保存技術は必要であると思います。予めデジタル化しておくと、それを基に再現することも可能になってきます。また、フランスのルーヴル美術館にあるモナ・リザは、精細なデジタル画像を世界中で無料で見られるのですが、拡大して見てみると目のあたりがどのように描かれているかなど、細かく精緻に見ることが出来るんですね。このように文化的資源の公開にオープンマインドな雰囲気を京都でも創り出して、京都にある非常に貴重な芸術作品を世界中の人が見ることが出来るようにする、そうすると必ず「実物を見たい」と現地にやってくるんです。発展的な工夫としては、室町時代の洛中洛外図に模して現代の市街地図を作成してみるのも興味ある試みだと思っています。

京都、大阪、奈良の三府県にまたがる「関西文化学術研究都市（けいはんな学研都市）」

学研都市と国際会館への期待

木下　長尾先生は2015年から今年の春まで国際高等研究所の所長をお務めでしたが、異業種分野の専門組織が多く隣接しているけいはんな学研都市の研究環境に対して、どのような思いをお持ちでしょうか。

長尾　けいはんなと同じように研究開発機関が立地しているアメリカのシリコンバレーでは、研究者同士が様々な形で横の連携を持っており、お互いに意見を戦わせ切磋琢磨することで非常にクリエイティブなアイデアがたくさん出ています。そのような環境に対して、けいはんな学研都市は130あまりの研究開発機関が立地しているのですが、横の連携がほとんどありませんでした。そこで国際高等研究所が中心となり、近隣の研究者に毎月1回、オープンマインドで集まってもらい議論をする「エジソンの会」を始めたんです。毎回テーマを決めてゲストレクチャーをしてもらい、みんなでたっぷり議論し、そのあと食事やお酒を共にしながらまた議論するという会を2年前から始めています。アメリカのようにはなかなかいきませんが、継続は力であり、最近では共同研究の話もいくつか出てきて少しずつ効果を感じています。国際高等研究所がジョイントとなり、けいはんな学研都市から非常に面白いアイデアが出て、それがどんどん社会に浸透していくことを期待しています。

木下　けいはんな学研都市と同じように、学問研究の発表や知的交流の場としての活躍を考えている京都国際会館が目指す方向についてご意見をお聞かせ願えますでしょうか。

長尾　京都国際会館は数千人の大規模な収容人数を誇る日本の代表的な国際会議場であり、同時に日本の文化も浸透させることができる重要な施設ですが、これからの国際会館にはいろいろな専門分野で20～30人規模の人達が泊まりがけで徹底的に議論するという国際的なワークショップを気楽にやれるような使い方も大いに奨励していただけると良いのではないかと思っています。京都にはたくさんの大学がありますので、複数の大学の人たちがお互いに議論したり、理工系だけでなく文科系の考え方も取り入れ、人間にとってどうであるか、または人間社会にとってどのような意味を持つかという観点で活動を行い、じっくりとした議論ができ、新しい考え方を創り出して京都から発信していけると非常に良いのではないかと感じています。

インタビュアー
国立京都国際会館 館長　**木下 博夫**

1943年生まれ。国土事務次官、阪神高速道路（株）社長などを経て、2012年3月から館長・常任理事を務める。

ICCK講演録 知の言葉
THE WORDS OF INTELLIGENCE

2018.2.10「京都環境文化学術フォーラム・国際シンポジウム」より

「KYOTO地球環境の殿堂」は、世界で地球環境の保全に多大な貢献をされた方々を顕彰するとともに、その功績を後世に伝えることを目的とする取り組みです。これまでに18名を殿堂入り者として表彰し、その功績は「京都議定書」誕生の舞台となった国立京都国際会館内に展示。京都議定書の精神を広く世界に発信しています。

9回目となる今年は新たに3名が殿堂入り者として表彰されました。そこで今号の特集は、2月10日に開催された国際シンポジウムでの殿堂入り者3氏の講演（要約版）をお届けします。

「成長の限界」から持続可能な社会へ 殿堂入り者3氏が語る環境の未来

農業生態学に基づく農業の実践で人類の将来課題の克服を

ミゲール・A・アルティエリ氏
カリフォルニア大学バークレー校名誉教授。生産性が高く、資源の節約に適した農業システムを研究する農業生態学を提唱・実践し、地球環境保全活動の推進などに貢献。

工業型の農業では達成できない環境保全と食糧確保との両立を

農業を支配する2つのパラダイムがあります。1つはテクノロジーベースの工業型農業、もう1つは農業生態学の方法論をとる小規模農業です。

大規模で単一栽培の工業型農業は、生物多様性の喪失、人の健康、土壌浸食、水質汚染等に影響を及ぼし、大量の温室効果ガスも排出しています。また、工業型農業において、世界の耕地の7、8割、水の70%、化石燃料の80%を使ってもなお9億2500万人が飢えています。しかもアフリカで飢えている人の多くを救えるであろう量の食物が大量に廃棄されているのです。

一方、ラテンアメリカ、アジア、アフリカには15億の小規模農家があり、190万種類の作物を生産しています。これらの農家は世界の耕地、水、化石燃料の2、3割しか使わないにも関わらず世界の食料の50～75%を生産しています。小規模農業がなぜ生産性が高いかというと、生物多様性を組み合わせ、作物と魚、虫、微生物などの相互作用をコントロールしているからです。

飢えの問題を解決するには、食料生産性の向上が必要ですが、気候変動にも適応しなければいけません。これは工業型の農業モデルでは達成できません。農業生態学に基づいた農業は、化石燃料に依存せず、環境への負荷が低く、自然に優しく、気候変動にも適応することができるのです。

持続可能な食糧システムづくり 食の帝国が支配する制度を変革

持続可能な食糧システムは、社会的な平等や環境の持続可能性を達成し、健康や文化に適切であり、地域経済を活性化させるものでなければなりません。農業生態学は社会科学、生物科学、農業科学に立脚し、地域の伝統や農民の智恵と融合したものです。国連食糧農業機関（FAO）などの報告によれば、農業生態学に基づいた農業への移行で、社会的及び環境的なメリットが得られ、持続可能な形で食糧を必要とするところに供給することができます。

しかし、そこにはいくつかの障害があります。支援のための政策環境や農民側のインセンティブが欠如し、市場や資金も十分ではないのです。大企業の影響力が強過ぎて、食料システム、種子、技術、情報発信にも障害があります。世界の種子市場では3社が60%を占めており、肥料は7つの会社がそのほとんどを支配しています。そして、大きなスーパーマーケットがどんな食料をいくらで売るかを決定しているのです。我々が「食の帝国」と呼ぶ、大企業が食のシステムを支配している制度を変える必要があります。

農業生態学に基づく農業が成功している事例はたくさんありますが、現在、南米の国々では、法を整備して、農業生態学を推進する社会運動を支援しています。政府が小規模農家の生産した作物を買い上げ、学校給食として提供している国もあります。

農業生態学に基づいた農業をより推進するためには、女性のエンパワーメントの推進、農家と消費者や農家同士のネットワークづくり、リーダーの存在、NGOや研究者など外部組織との連携、適当な市場や政策などが必要になるでしょう。

伝統的なコモンズをモデルに環境保全をどう進めていくか

マーガレット・アン・マッキーン氏
デューク大学名誉教授。コモンズ（共有資源）研究の第一人者として、日本の伝統的コモンズである「入会権」を世界に広め、持続可能な資源管理を提唱。

ただ乗り問題をどう解決するか 日本の歴史的コモンズ「入会」

人間は環境問題になかなか反応できず、できるだけ無視し続けるものです。反応する時にも簡単で安い是正措置を取りたがります。環境の質は共同で利用するモノ（共同財）ですが、守るためもしくは良くするための費用は少数が負担し、その恩恵は多数に配分されます。そして今日費用を負担する人と将来その便益を受ける人が必ず一致するわけではありません。

ゲーム理論という研究では、共同財を利用するにあたり、「ただ乗り」する人と「お人好し」の人がいるとしています。お人好しが費用を負担しても、多くの人がただ乗りをしていたら、共同財は存在することができません。人々は、ただ乗りができる状況ならば、お人好しに敢えてなろうとしないからです。それはつまり、「環境」のような共同財が存在できないということにもなります。

世界各地で長く生き残ってきたコモンズ（共有資源及びその管理法）を研究することにより、このようなただ乗りの問題を解決しようと試みてきました。コモンズの活用はヨーロッパ諸国でもインドやネパール、そして日本でも行われてきました。日本ではコモンズを「入会（いりあい）」と呼んでいます。明治期の1870年代に地租改正が行われるまで日本の土地の85%は入会地でしたが、多くの日本人はこの重要な歴史を知りません。入会という言葉すら読めない日本人も多いのです。

「ロマンチックではないコモンズ」安全な権利、民主的制度が必要

工業化以前の社会における、コモンズを紹介しましょう。たとえば上流で森林が伐採されると、下流でいろいろな問題が起きます。水を貯めたり、供給するのに支障があったり、漁業や農業に損害が生じる場合もあります。コモンズでは、伐採本数の制限をして影響が出ないようにするなど、そこに持続可能な資源の制限を設け、いろいろな方法で微妙な調整を行います。

女性初のノーベル経済学賞受賞者であるエリノア・オストロムは「コモンズはロマンチックなものではない」という言葉を残しています。人は合理的なエゴイストであり、ズルをしたり、人を裏切ったりします。コモンズは人間のそうした欠陥を十分認識して、非常に注意深く設計されているのです。

歴史上には非常に優れたコモンズがたくさんあります。その1つが日本の入会です。林業や漁業、水供給や温泉でもコモンズのシステムが使われてきました。それらを研究することにより、貢献の度合いに応じた公平で中立的な利益配分、適応性と柔軟性のある使用権、政府のサポートや法的な仕組みなども大変重要だということが分かってきました。

この伝統的なコモンズをモデルとして、ただ乗りの問題を回避し、環境保全を進めていくには、まず政策を実施、実践する制度が必要です。また、安全な権利を草の根レベルで提供する必要があります。さらには適切な財産権が欠かせませんし、民主的な制度も必要になるでしょう。

環境問題の影響をより小さく短期的にするアイデアが必要

デニス・L・メドウズ 氏
ニューハンプシャー大学名誉教授。経済成長が環境問題に及ぼす影響を予測し、地球環境保全に資する持続可能な資源利用のための政策モデルを設計。

「成長の限界」が現実のものに 最大の危機は、すでに来ている

45年前、我々は書籍『成長の限界』で、人間社会はこのまま成長し続ければ、やがては持続可能なレベルを超えるだろうと予測しました。21世紀の最初の数十年で地球上の物理的拡大は終わり、エスカレートする一連の環境危機によって終焉を迎えるだろうと予測したのです。そして、現在のさまざまな出来事により、この見解が正しかったことを物語っています。

工業生産や人口の増加は変曲点に達しました。世界はすでに物理的成長が下降する時代に突入し、気候変動の加速化や土壌浸食の拡大、海洋汚染の拡大、種の喪失の加速化などが明確になっています。さらに、権威的な指導者の誕生、大量の移民、エネルギー不足、そして米国や日本のデフレが問題となっています。これらは成長とは逆の変化の前触れで、2040年以降に最大の危機がやってくると考えられていますが、それは間違いです。人類はもうすでに最も深刻な問題を抱える時代にあるからです。根本的な問題は、有限な世界における人口や物質やエネルギーの流れの継続的で物理的な成長です。これらの増加への抵抗が最高レベルにある今、危機は加速化しています。地球環境産業技術研究機構理事長である茅陽一氏が開発した茅恒等式は、二酸化炭素排出量の増加を引き起こす人口と1人当たりGDP、GDP単位当たりのエネルギー、エネルギー単位当たりのCO_2排出量の4つの要因の相互関係を見事に提示しています。

環境を守る可能性を最大化する これまでと違うアプローチが必要

人類は茅恒等式の前半の2つの要因である「人口」と「物質的生活水準」を下げるために多大な努力を払わなければ、後半の2つの要因に対するインパクトは十分ではなく、総CO_2排出量を下げることはできません。それは京都議定書以来のこの20年の経験で明らかです。

環境を守る可能性を最大化するためには、解決可能な問題に注目することが必要です。それらの問題は、地域的、地球規模、そしてそれぞれ短期的、長期的なものに分けて考えることができます。短期的で地域的な問題に対する解決策を見つけることは比較的簡単ですが、地球規模、長期的な問題の解決策を見つけることは、政治的、経済的メリットが費用負担するに及ばないために困難となっています。

気候変動を否定する人たちは無知ではありません。単に短期の問題しか見ていないのです。アインシュタインは「問題を生み出した時と同じ思考でその問題を解決することはできない」と言っています。我々は、成長が問題の原因なのに我々は成長を推進し、短期志向の経済体制が問題なのに、経済的な解決策を導入しようとしています。違うアプローチが必要なのです。

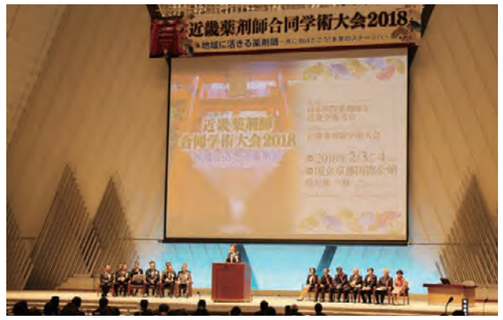
新しいアイデアとして、環境に対する脅威を排除するのではなく、環境の変化に対してより強靭になる方法もあります。問題の影響を小さく、短期的に抑えるような対策をとることもできます。環境に関するレジリエンス（回復力、強靭さ）がより重要になってきているのです。

京都市営地下鉄烏丸線の国際会館駅から会館へ通じるアプローチにおいて、COP3をはじめ地球の環境保全に多大な貢献をされた殿堂入り者の功績を、パネル展示しています。国立京都国際会館内展示スペースと合わせて、ぜひご覧ください。

EVENT REPORT 開催報告

近畿薬剤師合同学術大会2018

2018年2月3日 ― 2月4日



第39回日本病院薬剤師会近畿学術大会と第20回近畿薬剤師学術大会を合同とし、近畿薬剤師合同学術大会2018が2月3日から2日間の日程で、近畿2府4県の薬局や病院勤務の薬剤師約6,000人が参加して「地域に活きる薬剤師～ともに羽ばたこう!未来のステージへ～」をメインテーマに開催されました。

同大会は、在宅医療の担い手として薬剤師の役割に期待が高まる中で、新たな知見や業務改善の成果発表・討議を通じて学術・技術の向上を図るとともに、地域住民に良質で安心・安全な医療を提供するための連携と情報交換を狙いに開催されました。

初日の記念講演では山極壽一京都大学総長が「人類の進化と健康社会」と題して記念講演しました。また、「法律からみる医療安全」「医療安全における薬剤師の役割」「地域包括ケアシステムにおける薬局・薬剤師」など8つのシンポジウムが行われました。また、2日目は髙橋淳京都大学iPS細胞研究所教授らの特別講演やテーマセッション「地域に活きる薬剤師」なども開催されました。

第56回 関西財界セミナー

2018年2月8日 ― 2月9日

関西の企業トップや学識経験者が経営課題や経済問題について意見交換する第56回関西財界セミナー（関西経済連合会、関西経済同友会主催）が、2月8日から2日間の日程で「いざ、舞台を関西へ～関西からはじまる未来社会のデザイン～」をテーマに開催され、過去最多の665人が参加しました。

初日は松本正義関経連会長の問題提起の後、小宮山宏三菱総研理事長が基調講演。同日午後から2日目午前にかけて「関西の将来像を描く」「イノベーションを育む土壌」「関西―ONLY1の魅力」「グローバル資本主義と21世紀の企業像」など6つの分科会で、活発な論議が展開されました。

2日目午後には、政府が大阪誘致を目指す2025年国際博覧会（万博）によって「世界が直面する課題を克服した未来像を示す」などとする関西財界セミナー宣言を採択して、閉幕しました。また、「関西財界セミナー賞2018」の贈呈式や桂文枝上方落語協会会長による「商は笑なり～笑いが関西を元気にする～」と題した特別講演もありました。

INFORMATION vol.07 ニューホール建設工事

ニューホール完成間近!!

京都国際会館では、2018年6月末の完成に向けて、多目的に利用できる新しいホールの建設を進めております。

完成が近づき、内部にはまだ天井や壁などの内装工事のための足場が設置されていますが、最終的な仕上げや各種設備機器の取付作業が急ピッチで進められており、着実に完成へと向かっております。

ニューホールへの送電も予定通りに完了し、稼働に向けての重要なステップを無事に越えました。

ホール内
天井仕上げ
作業中

今後も安全第一で工事を進めてまいりますので、引き続きご理解を賜りますようお願いいたします。

※今後も、このコーナーでは、ニューホール建設工事の様子をお知らせしていく予定です。

駐車場のご利用について

工事期間中は駐車場のご利用を制限させていただきます（詳しくはホームページをご覧ください）。ご迷惑をおかけいたしますが、ご理解・ご協力を賜りますようよろしくお願いいたします。

ホワイエ
（ロビー）部分

共同開催・自主企画 EVENT REPORT

京都市「伝統産業の日2018」関連イベント きもの着付け＆和文化体験

2018年3月10日

京都市では、春分の日を「伝統産業の日」と定め、毎年この日を中心に京都の伝統産業の魅力を発信する様々なイベントを実施しています。国立京都国際会館でも、3月10日に市内の中学・高校生と留学生を対象とした「きもの着付け&和文化体験」を開催。参加した169名が華やかなきもの姿になり、文化に触れる春の1日を楽しみました。

参加者たちは、午前中にきものの着付けを体験。そのまま、きもの姿で京都の街中へ繰り出して自由散策。午後からは国際会館に戻って、茶道、京くみひも、京鹿の子絞り、金彩工芸、提灯作りの5つのメニューから1つを選んで伝統文化や工芸品作りを体験。最後にプロカメラマンによるきもの姿での記念撮影をして、充実の1日を終えました。

ICCK自主企画 桜・さくらスペシャルデイズ 2018

2018年4月7日 ― 4月8日

春の庭園特別開放イベント「桜・さくらスペシャルデイズ」を今年も開催しました。ソメイヨシノは例年より早く咲きましたが、枝垂れ桜や八重桜が続いて咲き、春の彩りを満喫いただくことができました。メインホールでは、京都市立芸術大学学生による弦楽アンサンブルコンサート、ボーカルグループ「SANISAI（サニサイ）」が奏でる温かなハーモニーを、来館者は心地よく聴き入っておられました。地域の団体、大学、高校、幼稚園の参加企画をはじめ、京都国際会館の周辺の美しい自然をテーマにした、「森のパネル展示」や「クワガタ・カブトムシコーナー」など、家族で参加できる多彩な企画でにぎわい、両日で延べ3,300人もの市民の方々に、楽しい春のひとときをお届けすることができました。

PICK UP ピックアップイベント

第26回 日本乳癌学会学術総会および市民公開講座

2018年5月16日 ― 5月19日

第26回日本乳癌学会学術総会が、5月16日から4日間の日程で「Creative Japan 新たな時代」をメインテーマに開催されます。乳がん患者数はあらゆる年齢層で激増しており、検診の考え方や予防戦略にも大きな変化の兆しが出ています。画像診断で微小病変や進展範囲が正確に把握でき、がんの特性や機能の一端が見えるようになりました。乳がんのバイオロジーに関する理解が深まり、がん患者における複雑な癌の動態の見える化が進む中で、新しい治療法開発が進んでおり、最新の治療法が今後どのような形で臨床に取り込まれるのかなどの点について意見交換が行われる予定です。

乳がん領域において新たな四半世紀の始まりになる今回、乳がんに関与する全ての医療者、研究者、大学院生、学生らが集い、意見を交え、最新情報の共有と新たな時代に向けた論議を展開します。

第18回 国際薬理学・臨床薬理学会議（WCP2018）

2018年7月1日 ― 7月6日

第18回国際薬理学・臨床薬理学会議（WCP2018）が7月1日から6日間の日程で開催されます。同会議は1961年から国際薬理学連合（IUPHAR）が4年ごとに開催している、薬理学分野で最も由緒と権威のある国際会議で、日本での開催は37年ぶり2回目です。

この会議のメインテーマは「薬理学の未来―科学、薬物開発、新規治療―」で、基礎から臨床および薬物開発に至る薬理学に関する最新の研究成果の国際的な発表と情報交換の場が設けられます。7月1日には市民公開講座も開催され、薬理学の研究が身近な生活の中でどのような効果を発揮しているか、今後どのように発展し未来に役立てていくか等を市民の皆様に分かりやすく解説します。

Event Calendar 2018.5 May - 7 July

催事名 Pick up …ピックアップイベント（p.6参照）	日程
平成30年第2回NST専門療法士更新必須セミナー	5月 13日
Pick up 第26回日本乳癌学会学術総会および市民公開講座	5月 16日－19日
第2回全国在宅医療医歯薬連合会全国大会	5月 26日－27日
第60回日本老年医学会学術集会	6月 14日－16日
第19回リチウム電池国際会議	6月 17日－22日
第32回日本外傷学会総会･学術集会	6月 21日－22日
平成30年度公益社団法人京都府看護協会定時総会	6月 23日
Pick up 第91回日本薬理学会年会/第18回国際薬理学･臨床薬理学会議	7月　1日－　6日
あすか会議2018	7月　7日－　8日
2018年 公認スポーツファーマシスト基礎講習会（京都会場）	7月 15日
第27回国際液晶会議	7月 22日－27日
第6回日本糖尿病療養指導学術集会	7月 28日－29日

京都の門前名物

あぶり餅

撮影協力：一文字屋和輔

洛北の古社・今宮神社の門前。風情のある京町家の軒先から漂う香ばしい匂いが、参拝者たちの足を引き止めます。名物は「あぶり餅」。餅をひと口大にちぎってきな粉にまぶし、竹串にさして炭火であぶり、甘い白味噌のたれでいただきます。焼き色のついた餅の香ばしさとたれの甘みが絶妙で、素朴ながら風味豊かな味わいです。

今宮神社は平安時代以前からの歴史を伝え、疫病から都を守る神社として信仰を集めてきました。あぶり餅の歴史も古く、平安時代に悪疫退散を願って今宮神社に供えた餅が由来と伝わります。ひと口サイズの餅で、千年の歴史を味わう門前名物です。

今宮神社

市バス「今宮神社前」バス停下車すぐ
市バス「船岡山」バス停から徒歩7分

平安時代以前から疫神を祀っていたと伝わる神社。例年4月第2日曜日の「やすらい祭」は国の重要無形民俗文化財。桜や椿の花で飾られた花傘を中心に、赤毛・黒毛の大鬼に扮し鉦や太鼓を打ち鳴らし街々を練り歩く独特の祭。京の三奇祭の一つに数えられています。

表紙：写真は本館1階 ラウンジ。周囲を春の襲（かさね）の色目「紅つつじ」をイメージした、蘇芳色に薄紅色の花格子文様で彩りました。

ICC Kyoto 2018 Spring
平成30年4月発行 年4回発行

ICC Kyoto
Kyoto International Conference Center
編集発行 公益財団法人 国立京都国際会館
〒606-0001 京都市左京区宝ヶ池
TEL 075(705)1218　FAX 075(705)1100
E-mail com@icckyoto.or.jp　URL http://www.icckyoto.or.jp/

国立京都国際会館 検索

©All right reserved－Kyoto International Conference Center